

「ムスリムの生活世界とその変容——フィールドの視点から」(平成 20 年度第 1 回研究会)

日時：2008 年 7 月 12 日 (土) 13：30－18：30

場所：AA 研棟マルチメディア会議室(304 号室)

報告者と報告タイトル：

谷正人 (神戸学院大学：研究協力者)：

イラン伝統音楽の「楽譜」をどう考えるか—音楽を可視化することの問題点、「学習プロセスにおける楽譜」「音楽伝承における記譜」「音楽研究における楽譜」

新井一寛 (京都大学 ASAFAS：AA 研共同研究員)：

スーフィー教団の儀礼における音、リズム、視覚効果、身体、意識変容についての一試論—研究上の映像実践の有効性に関する考察も交えて

総括的コメントと討論

コメンテーター：堀内正樹 (成蹊大学：AA 研共同研究員)

研究会概要：

今年度第 1 回の研究会では、「ムスリム社会とその研究における映像と音——儀礼と音楽の調査から」というテーマの下、二人の新進の研究者の方に発表していただいた。

一人は谷正人氏 (研究協力者) である。イラン音楽の専門家として現地調査に基づき博士論文を執筆され、その成果を『イラン音楽——声の文化と即興』(CD つき、青土社)として刊行している。同書は、副題から予想されるように、オングの『声の文化と文字の文化』(藤原書店)に依拠しながら、イラン音楽の「即興」と呼ばれているものに理論と実証の両面からアプローチし、刺激的な議論を展開されている。今回の発表ではイランの伝統的音楽において「楽譜」に記すという現象に焦点を絞り、3つの側面からの批判的考察を加えた。

もう一人は共同研究員の新井一寛氏で、フィールドワークに基づいて、エジプト・カイロのスーフィー教団の儀礼研究で博士号を取得されている。スーフィーの儀礼に関する新しい分析視点を提出されるとともに、儀礼の映像化も試みられており、それに基づいて映像人類学の領域にも進出し、さまざまな企画や催しを活発に実現されている。今回は、映像を通してカイロのスーフィー教団の新しい動向を紹介すると共に、民族誌資料としての映像の持つ意味・可能性についてもいくつかの重要な問題提起をされた。

総合的コメントは、マグリブ地域を中心とした宗教や「音文化」の研究を進めている堀内正樹氏が行った。音楽・映像の問題に論評を加えながら、民族誌的記述のあり方にもふれた大きな視野からのコメントにより、フィールドワークの方法論にもつながる今後の議論の広がりが示唆された。(大塚和夫)

報告内容：

報告 1：イラン伝統音楽の「楽譜」をどう考えるか—音楽を可視化することの問題点、「学習プロセスにおける楽譜」「音楽伝承における記譜」「音楽研究における楽譜」

本発表は、従来口頭で伝承されてきたイラン音楽に五線譜が導入され、今や唯一の記譜法として定着したことが音楽にどのような影響を与えているのかについて、「学習プロセスにおける楽譜」「音楽伝承における記譜」「音楽研究における楽譜」という 3つの側面から

考察したものである。

1) 「学習プロセスにおける楽譜」

イラン伝統音楽の学習においては、「無数の大小様々の伝統的旋律型の集成（ラディーフ）」が丸暗記方式で弟子へと伝えられる。つまり学習者は当初、それらの旋律型を「聖典」「実体」として把握する傾向がある。

しかしこうした学習の目的は旋律型をただ機械的に数多く覚えることではなく、それらの「列（ラディーフの第一義）」としての繋ぎ合わされ方からイラン音楽の緩急を学び取り、そのことによって最終的に即興演奏を可能にすることにある。そして実際に学習者たちは、別のラディーフや実際の演奏においては同一名称の旋律型が必ずしも同じ形態ではないことなどから、個々の旋律型に対する範列的認識から旋律型間相互の連辞的認識へと、その学習のあり方をシフトさせてゆくのである。

つまり即興演奏へと向かい始めた学習者たちの間では「書かれた楽譜の固定性を額面通りには捉えない」「ラディーフ（譜）を聖典ではなく、師匠による規範解釈の一つのサンプルとして捉える」感覚が生成することになる。しかし五線譜の存在は、学習者によっては額面通りの「硬直性」として作用し続け、上記感覚へのシフトを遅らせる要因ともなる。

2) 「音楽伝承における記譜」

そもそも、即興演奏を可能にするためのラディーフ習得とは端的に言えば、イラン音楽の「慣用句・決まり文句」を自身の語法として無意識のうちに内面化することである。つまりその記憶は、とりわけ口頭伝承においては書き留められないおぼろげな「思い出」に近く、またそれは個人のもものではなかった。

しかし五線譜の導入は、音楽を「見る」「見るように聴く」感覚をもたらし（音楽は視覚的に捉えることで逐語的・自律的に「見える」）、更にそれは「ここで示されているものは、もう既に誰かによってこのように存在させられてしまっている」という「作者信仰の文化」（近代的な「作者」「個人」概念）へとも繋がってゆく。

つまり、かつて「楽譜を介さない」感覚において即興演奏の「一回性」とは、音楽を思い出す内的なプロセスがその都度あるということだったが、「楽譜を介した（音楽を見るように聴く）」感覚においては、演奏結果（プロダクト）が一回限りということになる。それは即興演奏にその都度、文字通りの「新しさ」が要求されるようになるという変化を示している。

さらに楽譜出版の分野では、同じラディーフでも書き留める人間によってかなり差のある楽譜がそれぞれ流通している。つまり五線譜による音楽の伝承には、「書き手の解釈」が如実に露呈し、それは「楽譜を見る」次の世代にも大きな影響を及ぼしているのである。

3) 「音楽研究における楽譜」

このように「五線譜の導入」に伴う様々な現象は、「個性を重んじる方向へ」というイラン音楽の新しい流れに実は根底で繋がるような変化群だったと言えよう。それは、そこで示されるものの「新しさ」の意味が、「伝統的なものの再生産」から、「作曲」のような感覚で人と違うものを提示するというような、より近代西洋的な価値観を帯びた変化のことである。

楽譜の存在を自明としがちな西洋音楽研究から出発した従来の音楽学は、このような変化を意識化することに遅れをとった。そのためイラン音楽の先行研究は、個々の旋律型に

対する認識が範列的なまま行なわれたり、或いは楽譜を固定的に捉える認識から抜け出ないまま即興演奏を「基本形を中心とした変奏」と捉える傾向などがあった。それはまさに、西洋音楽史が「大作曲家」「名曲」の個性を中心に描かれ、それらが称揚されてきた傾向とリンクするだろう。「音楽を可視化すること」の問題は、担い手の意識変化のみならず、それを「変化」として受け取れない、「個性」を前提とした研究のありかた自体の問題へとも繋がってゆくのである。(谷正人)

報告2：スーフィー教団の儀礼における音、リズム、視覚効果、身体、意識変容についての一試論—— 研究上の映像実践の有効性に関する考察も交えて

本発表の内容は、大きく分けて次の3つであった。第一に、フィールドワークを主な方法論とする地域研究や人類学を中心にした、研究上の映像実践の全体像に関する概略的な説明。第二に、実際の映像資料・作品上映を含む、エジプトのスーフィー教団の儀礼の紹介、およびその儀礼における音とリズム、視覚効果、身体、意識変容の相関関係に関する考察の簡単な見通しの説明。第三に、スーフィー教団の儀礼の「加工」・表現と、研究者によるプレゼンテーションに見られる「加工」・表現の類似性が、研究者のプレゼンテーションの在り方を考えるにあたって、どのような問題提起ができるのかについてのいくつかのアイディアが提示された。

第一では、映像活用の類型として、資料的活用、分析的活用、表現的活用が挙げられた。また、被調査者(撮影者)との関係をめぐって、映像の共有的活用、コミュニケーション的活用やインディジーニヤス・メディア運動などの例が挙げられた。さらに、映像が、文理を問わず、研究者間の学際的研究活動を促進する効果がある点についても言及がなされた。また、地域研究と映像実践の親和性が高い点についても触れられた。そのほかにも、この類型を基に、GISやGoogleearth、各種地図画像データ、歴史映像データなどの「マクロ」映像データとの組み合わせによる、データベース構築の可能性についても言及がなされた。また、各映像実践が、各時代のメディア状況により影響を受けるものであり、それを考慮した各時代状況下における研究者による「戦略的」な映像実践の在り方を模索する必要性などについても述べられた。

第二では、ハーミディーヤ教団やティジャーニーヤ教団、スィンナーウィーヤ教団、ショブラウィーヤ教団など、エジプトのいくつかのスーフィー教団の儀礼の様子をおさめた未編集映像素材が、適宜、早送りされながら紹介された。また、ジャーズーリーヤ教団の地方支部視察の様子を扱った、映像作品の上映もなされた。ここでは、未編集映像素材と作品という異なるジャンルの映像の上映が行われた。それには、限られた時間内でのプレゼンテーションにおける映像活用の在り方を考えてもらう狙いもあった。ちなみに、ここでは行わなかったが口頭発表と上映映像をひとつの映像作品として上映する試みもある点についても言及がなされた。また、ジャーズーリーヤ教団の儀礼の観察結果から、音とリズム、視覚効果、身体、意識変容の相関関係にある程度の規則性があるという予想について述べられた。

第三では、ジャーズーリーヤ教団の儀礼の近代的組織化、パフォーマンス化、映像化、CD化などに見られる、儀礼の「加工」と、その儀礼および「加工」を研究対象としている、発表者による発表・上映の在り方の類似性について述べられた。その上で、その類似性が、研究者のプレゼンテーションの在り方を考えるにあたって、どのような問題提起ができるのかについてのいくつかのアイディアが提示された。(新井一寛)